



編集後記

記念すべき通巻750号の特集は「感染症の診療・検査・研究を担う次世代へのメッセージ」で、医学系14分野の先生方にそれぞれご専門の視点からご執筆いただいた。

1970年以降に出現した新たな感染症であるエボラ出血熱、猫引っかき病、トリインフルエンザ、SARS、MARS、SFTS等、いわゆる新興感染症の多くは人獣共通感染症である。新興・人獣共通感染症の出現の背景には、動物、特にペットや野生動物と人との関わり方が大きく変化してきたことが影響している。私は犬が好きで、子供のころから何頭も飼っているが、昔はみな屋外飼育であった。現在のわが家の愛犬は、ウイペットという短毛種で、暑さ寒さに弱いので室内飼育をしている。暑い日や寒い日に家族が外出をするときは、犬のためにエアコンをかけていくので、犬はソファの上でゆったりとお犬様状態で留守番をしている。さすがに犬と一緒に寝ることはしないが、家の中で家族と過ごす時間は、私に比べると犬のほうがずっと長い。また、若者の多くが都会に出てしまった農村部では、里山の崩壊が起こり、鹿・猪・猿・熊などの野生動物が人里近くをわが物顔で闊歩するようになってきた。そうすると、体に付着していたマダニを人の生活圏にポロポロ落としていくので、マダニの生息域が拡大するとともに、日本紅斑熱やSFTS等のマダニ媒介感染症が多発するようになった。さらに、天敵のいないアライグマやハクビシンなどの外来野生動物が増えて、わが国固有の生態系を脅かし、住居に侵入する等の被害も問題視されるようになってきた。数年前、私が夜遅く帰宅した際に、ゴミ箱をあさっているアライグマとばったり対面して、お互いにびっくりしたこともあった。このように、動物と人の距離は、以前にも増して近くなっているのが現状ではないだろうか。

近年では、MRSA、VRE、ESBLなど様々な細菌の薬剤耐性（AMR）の問題が世界的な話題として取り上げられるようになった。2015年の世界保健総会では、AMRに関するグローバル・アクション・プランが採択され、加盟各国は2年以内に薬剤耐性に関する国家行動計画を策定することを求められた。家畜の分野でも、抗生物質は疾病の治療・予防、飼料中の栄養成分の有効利用を目的とした飼料添加物として、大量に使用されてきた歴史がある。現在も、わが国では生産される抗生物質の6割以上が、動物用医薬品や飼料添加物として使用されている。

現代のようにグローバル化・ボーダーレス化した社会では、感染症やAMR等の問題は、医学、獣医学、薬学、生態学などの分野が単独で、また一国では解決することはできなくなってきた。そのようなことから、人だけでなく動物とそれを取り巻く環境（生態系）の問題を包括的に「ひとつの健康」として捉え、関連する学術分野が連携して解決に当たる必要があるというOne Healthの概念が国際的に提唱されるようになってきた。今回の特集の中では、残念ながらページ数の都合で取り上げることができなかったが、本誌の編集委員会でもOne Healthは重要な項目であると認識しているので、今後、特集を組むなどして掲載を検討したい。

丸山総一